

対処に理由はいらぬ



「百舌の巣」のポスターです

三人の自閉スペクトラム症の子の父親
自身も当事者

一心

いっしん 長男が発達障害と診断されたことで、自身も当事者と気づく。発達障害の有無にかかわらず、お互いのことを知るだけでより豊かに暮らせることを伝えたいと、相互認知の場「百舌の巣」で活動中。ブログ「僕は推定アスペルガー」。

自分が子どもだったころ、また親として学校とかかわるようになって、一番不要で不快に感じていたことが「すり合わせ」

「すり合わせ」はいつない

昨年度は、ASD当事者であり、ASDを持つ子どもの親として、「当事者の世界」にふれる」という内容で連載をさせていただきました。感覚過敏を中心に、当事者である僕が日ごろ感じていることや、自分の内面について書いてきたつもりです。

今年度は、「それを知った上で、まわりの人は実際にどのように行動すべきなのか？」を書いていきたいと思っています。

「特性とその対処」が、今年度のテーマです。

「すり合わせ」とは、いわゆるお互いの認識の確認のこと。「いつ、どこで、誰が、なぜ、何をしたか？」を確認する作業です。

学校側からすれば、保護者に説明する上で必須の内容でしょう。たしかに説明をする際には、これは外せないと思われています。

しかし、当事者にとって「何か」が今起きている現場において、この「すり合わせ」よりも大事なことは、当事者が「何を感じ、何を考えているのか」に気がつくことです。何が正しいかではなく、目の前にいる子どもが「何に困り、何に苦しんでいるのか」「どのような助けが必要で、どうすべきなのか」を考えることだと思います。

状況の確認や、本人の気持ちと合致しない声かけは、当事者を混乱させるのですべきではありません。支援者としてどう行動すべきなのかを実行に移す瞬間が大事です。

世に出るための手順が必要

僕には極度の人見知りがあります。買いたいものがあつて店に行つたのに、店員に声をかけられただけで気分が悪くなり、店から出てしまつたり。親戚でも数年会つていないだけで、まるで知らない人と会うくらい緊張したり。友達でも、きょうだいでも、それは起きました。「そんなことがあるんだ！」と、僕の周囲にいる人はその事実には驚嘆します。ただ、上には上がいるわけです。

それが僕の三男。彼は、僕の三人の子どもの中で最も自閉傾向の強い子どもです。いわゆる「普通の子」とはまるで違いました。

三歳で受けた田中ビネー知能検査では、言語は一歳以下で判定不能。記憶と図形は六歳以上で判定不能。総合IQ60。

IQなんていうくだらない数字に僕の三男の評価が出るわけがないことは知っていたので、そんなことは気にもしませんでした。ただ、でこぼこの傾向と対

策を講じる上で必要なので、IQの傾向はある年齢で調べるようにはしていません。

三男が三歳のころ。僕はどうすれば彼が幼稚園に行けるようになるのかを考えていました。常識的ではない「人見知り」だったからです。

三歳児検診に連れて行けば、同年齢の子どもがいるのを見て、全裸で逃亡しようとした。地区センターの幼児プレイルームに連れて行こうとしたら逃亡。数日後、自転車で地区センターにつながる道を記憶していたようで、その道を走行していただけで激昂。自転車から飛び降りようとなりました。

人様から見ればかなり強烈なものだとは思うのですが、僕的には想像もでき、まだ笑える範疇でした。

三男を幼稚園に行かせるために、僕は段階的にいくつかのステップを踏むことにしました。

①僕と三男だけにした部屋の中で、「外に行く」と楽しいことがたくさんあるんだぞ」という話をする。

このとき三男は、家の外に出ることすら恐れるような子でした。その子を外に連れ出すためには、このステップは欠かせなかったと今になって思います。

②人がいない河原や野原に行く。
人がいるところでは異常に緊張する三男でしたが、僕と二人きりであればリラックスできることがわかりました。そこで、「外に出てもらってリラックスできる状態があること」↓「外に出ることは楽しいこと」になるようにしていきました。

③人がいない公園に行く。
ステップ的にはこの後いくつかあるのですが、後述する事件はここで起きました。

④人がいない図書館に入る。
⑤老人しかいない公園に入る。
⑥三男よりも年下の子どものみしかいない公園に入る。

⑦同年代の子どもがいるが、接触しないように配慮して公園に入る。

⑧同年代の子どもがいるが、基本的に接触しない環境が守られることを前提と

して図書館に入る。

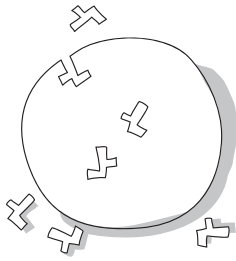
⑨ 同年代の子ともがいることを確認して（あるいは後から来ることを確認して）公園に入る。

⑩ 同年代の子どもを対象とした体操教室に参加する。

⑪ 誰もいないプレイルームに入り遊び、誰か来たら即退出する。

⑫ 誰もいないプレイルームで遊び、他の子が来ても退出せず、本人の状況を見つつ、退出する時間を延長していく。

⑬ 誰かがいるプレイルームに入り、臆することなく入室し遊ぶことができるようになる。



⑭ プレイルームに行くことを楽しみにしていることを確認できるようにする。

そんな手順を約二年半かけて踏み、三男は徐々に家の外に出ていく準備をすることができました。その過程にあつて、僕が一番驚いたことが、三男の「人見知り」でした。

母親に「人見知り」

事件はステップ③「人がいない公園に行く」で起こりました。

三男にとつての「人」とは、たぶん自分と僕だったのかなあと思います。二人の兄と母親が家族でいますが、彼の中で別の何かに分類されていたとは思えません。

「人がいない公園に行く」というステップが必要だったのは、自分と三男以外の人がいないことでした。後から誰かが来れば、僕たちが退出する。それがルールだったので、僕のルールを上回るものを三男は構築していました。

ある日のお昼前。

僕と三男が公園で遊んでいるときに奥さんが来ました。お昼ご飯に何を食べたのか、買い物に行く前に確認するためでした。

奥さんが公園に入つて来るなり、三男は異常な呼吸をしました。過呼吸です。異常な呼吸は続き、三男は痙攣を始めた。僕は奥さんに即座に公園から立ち去るように命じました。ありがたいうちに奥さんは何も言わず、公園を後にしてくれました。

対処に理由はない

今となつてはこうして理由を説明できるようになっていますが、当時はまるで理解していませんでした。

三男がしていたことはいわゆる「場所見知り・人見知り」の類です。

僕も普段仕事でレストランに通つていて、顔見知りの従業員でも、私服のときに偶然出くわすと誰だかわからなくなってしまうことがあります。また、同じ制



服を着ていても、近くのコンビニなどで顔を合わせると、瞬間的に誰だかわからなくなってしまうことがあります。

三男が起こした症状は、これの超絶強化版なのでしょう。

僕が三男に言ったこと。

「あー、変な人(奥さん)が来て怖かったね。ごめんね、お父さん気づかなかつたよ。もういないから大丈夫だよ」

その声をかけ続けることで、三男は平静を取り戻しました。

帰宅すると、買い物物をすませた奥さんが家において、「おかえり」と笑顔で迎えます。三男は文字通り諸手を挙げて奥さんに向かい、抱っこされて「きゅーきゅー」喜びました。

あのととき公園で、「ほら、よく見てごらん。あれは母ちゃんでしょう。安心できる人なんだよ」そう言いながら、怯える息子を抱きかかえ母親のほうに向かうこともできたのかもしれない。しかし、そうすれば、三男の精神は崩壊。まともな人と向き合うことができない人間になっただけだと思えません。

常人からすれば僕も「異常」な「人見知り」ですが、そんな僕をもってしても三男の「人見知り」は「理解不能」でしかありませんでした。

自分の感覚を凌駕する人の感覚を理解することは不可能です。ですが、自分の感覚を凌駕する人がいるのだと認知できれば問題は無いのです。自分が持つていない感覚を理解できないことが怖いのではなく、自分が感じ取れない感覚を否定してしまうことが怖いことなのだと思っただけです。

変化の最中を見られたくない

今お話しした内容は、いわゆる「場所見知り・人見知り」なのですが、これと似たような現象で「変化の最中を人に見られたくない」というものがあります。具体的な例ですと、「園服に着替えるところを見られたくない」というのと、「髪を切られているところを見られたくない」でした。

僕の子どもたちが通っていた幼稚園に

は園服(制服)がありました。園服にはボタンがあり、サスペンダーもあり、一人で着用するには練習が必要でした。この園服を着るための練習を家でするとき、子どもたちは僕以外の人に着替えをしているところを見られることを拒絶しました。着替えの練習をするときは、該当する子どもと僕が個室に入り、他の誰も入ってこないように言い渡してから練習を始めました。

髪を切るときも、家に誰がいると切れないので、奥さんには買い物に行ってもらい、その隙に僕が切るようにしていました。

幼稚園に通うようになってからは、どの子ども、他の人に園服に着替えているところを見られても平気になりました。小学校に入学するころには、人前で髪を切られることも普通にできるようになりました。理由は僕にもわかりません。ただ、されて嫌だと感じていることはやらない。理解できなくても、それを受け入れる姿勢が大事なのだと感じています。